



## 年頭所感



一般財団法人ベンチャーエンタープライズセンター  
理事長 市川隆治

VEC関西支部の皆様、明けましておめでとうございます。

昨年5月、久しぶりにパリを訪れた。留学と勤務で合わせて5年半パリで暮らした私にとって、一番パリを感じさせるのはメトロに乗った時の独特の消毒液の匂いである。この匂いは40年経っても変わっていない。嗅覚の記憶はずっと残るものらしい。そういえば台北ではそれはニンニクの刺激臭だった。朝アパートの窓を開けると強烈な刺激臭が鼻を襲ったこともあった。ニンニクが苦手な人は台湾駐在にはきっと苦労するだろう。

さて、パリを訪れたのは“VIVA TECH 2024”に参加するためである。来場者数165,000人を誇る欧州最大規模のスタートアップイベントである。昨年のCountry of the Yearが日本であり、日本からも内閣府をはじめ、大企業やスタートアップがブースを構えていた。

既に何人かの参加者が会場の様子や展示内容をそれぞれレポートしているようなので、そちらをご覧くださいとして、私は全く独自の調査を行った。フランス政府が推し進める学生起業家支援プログラム（俗称ペピット）がどれだけ若い人たちに浸透しているのかを、フランス各地方のブースのできるだけ若い人にインタビューして回り、調査したのである。中には正にペピットに参加したという人もいたが、大多数の人はペピットとは何か全く知らないという回答であった。最近グランゼコールのエリート達が官僚や大企業に勤めるよりも起業することに目を向けるようになってきていると聞いているフランスにおいてすら、政府の支援施策は若い人たちにそれほど知れ渡っているわけではないことが明らかとなった。

ましてや日本においておや、というのが私の結論である。これこれの支援拠点を開設したので自由に活用してほしいというやり方ではもはや済まないのではないか。高校生に将来起業するという選択肢があることを認識させるためには、すべての高校において、「総合的な探求の時間」を活用してビジネスプラン作成を一度は経験させることが必要なのではなかろうか。そのためにはまず知識を教えるのではなく、学習の伴走者となる教師の在り方から変えなければならない。長い長い道のりとなろうが、アメリカには遅れをとったが、急速に追いかけているフランスやエストニアの事例も参考にしながら、日本における起業力学習を実現していけたらと考えている。



## いよいよ万博！



公益財団法人大阪観光局 理事長 溝畑 宏

皆様、新年あけましておめでとうございます。

今年は2025年日本国際博覧会（大阪・関西万博）が4月13日にいよいよ開幕します。160を超える国・地域・国際機関が参加し、未来社会の実験場として、人類共通の課題解決に向けた先端技術などを発信する国際的なイベントです。世界中から多くの方が日本、大阪を訪れ、まさに世界から注目が集まる半年間となりますので、日本の魅力を世界の方々に実感していただく絶好の機会にして行ければと思います。

今回の万博のテーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」です。前回の大阪万博のテーマは「人類の進歩と調和」でした。今回のテーマは分かりにくいとか、抽象的過ぎるとの意見もあるようですが、1970年までの変化、また1970年からの変化はまさに目を見張るものがありました。今回の万博でも新しい技術にたくさん触れられますし、それが今後どんどん実現して、さらに人類は発展していくことでしょう。1970年、世界の人口は約37億人。今は80億人を超えています。まさに人類大繁栄の時代です。ただ、その一方で失われているもの、大切に守らなければならないものもまた見えてきました。それは「人類と地球との調和」だと考えています。一人ひとりが万博開催を契機に少し立ち止まって考える、そうした時間を持ってほしいという思いを強く感じています。

現在はいつでもどこでも同じものが簡単に手に入る時代で、非常に便利で快適になりました。だからこそ、そのことに感謝し、自分は周囲の人やものに対して何ができるかを考える機会にさせていただければと思います。日本にはこうした生活や考えがまだ深く根付いていると思います。それが、まさに生命に力を与える、生命を守る、生命を繋ぐというものになります。これはまさにSDGsそのものです。今回の万博が大阪・関西、そして日本という場所で、世界的課題のSDGs目標の中間点である2025年に開催されるということは世界的な要請であるとともに必然のことと確信しています。

また今回の万博は、バーチャルをはじめ、最新のテクノロジーを使っています。会場に行きたいけど行けない、そうした方も万博に触れることができますし、参加することができます。万博会場そのものが「未来社会の実験場」であるように多くの人に自らが主役として体験してほしいと切に願っています。人の記憶や考え方において、体験は非常に大きなウェイトを占めます。ぜひ一緒に体験しましょう。

最後に、本年も皆様の益々のご健勝をお祈り申しあげるとともに、さらなるご指導お力添えを賜りますようお願い申し上げます。





# 年頭所感

近畿経済産業局長 信谷 和重

令和7年の新春を迎え、謹んで新年のお慶びを申し上げます。

## ◆ 2025年の関西経済の展望 ◆

我が国経済は、名目GDPで600兆円を超える規模となりました。設備投資は100兆円を超え、昨年の賃上げ率は33年ぶりの高水準となり、成長と分配の好循環が動き始めています。他方で、国内では、人手不足や物価の上昇の課題があり、国外では、第2期トランプ政権の今後の政策動向、中東、ウクライナ情勢など十分に注視する必要があります。我が国全体としては、昨年11月に決定された「国民の安心・安全と持続的な成長に向けた総合経済対策」を活かし、賃金と投資が牽引する成長型経済に確実に移行しなければなりません。関西では、今年、万博が開かれます。関西経済発展の大きな刺激となることが期待されます。



## ◆ 中小企業を取り巻く経営環境と近畿経済産業局の取組 ◆

関西の経済は、流通、小売、サービス業から、世界的技術を有する企業まで、幅広い中小企業によって成り立っています。活気づく経済にあって、中小企業は、賃上げと人材確保、物価・エネルギー価格上昇と価格転嫁、金利への配慮など、様々な課題に向き合わなければなりません。そうした中で、ロボット導入など省力化投資、人的投資で生産性を高める動き、DX（デジタル・トランスフォーメーション）で経営のあり方を変え収益を高める動きなど、先進的な動きが見られるようになってきています。近畿経済産業局としては、経済対策に盛り込まれた支援策の普及、下請Gメンによるヒアリング、パートナーシップ構築宣言の拡大、よろず支援拠点の活用、下請振興法の改正による資金繰りの改善などによって、中小企業を支援してまいります。

## ◆ 新たな地方創生 ◆

昨年は、地方創生の取組が本格的に始まった「地方創生元年」から10年の節目を迎えました。昨年11月に閣議決定された経済対策では、地方創生の交付金が倍増され、地域の独自の取組を、計画から実施まで強力に後押しすることとしております。またGX投資の予見可能性を高めるため、国として20兆円規模の先行投資支援を行い、官民で150兆円を超えるGX投資を行っていきます。加えて、中堅企業成長ビジョンを策定しつつ、地域経済の担い手として中核的な役割を果たすことが期待される中堅企業の自律的な成長の実現等を通して、地方創生の後押しになるよう取り組んでまいります。

## ◆ 大阪・関西万博と関西経済 ◆

大阪・関西万博では2800万人を超える来場者が見込まれており、うち350万人は海外からと予想されています。近畿経済産業局では、万博来場者が地域を訪れ、関西全体が活気づくよう施策を講じています。例えば、地域活性化の取り組みを紹介する「360°EXPO拡張マップ」、地域企業を紹介する「オープンファクトリー」、アジアの有力旅行代理店を招いた万博+地域の旅行プランづくり支援などを行っています。また、10月の万博終了後も、関西は世界の注目を浴びる地域であり続けなければなりません。万博では「未来社会の実験場」として様々な取組が披露されます。それらを関西に実装して、経済発展の原動力とすることが重要です。例えば、万博では、スタートアップが、世界の投資家等と一緒に、地球規模の課題に挑戦するイベントが開催されます。万博後の関西も、人類の課題に挑むスタートアップの世界的拠点となることが期待されます。また、水素や次世代空モビリティなど、新しい技術の社会実装を進めなければなりません。近畿経済産業局ではこうした動きを支援してまいります。

以上より、近畿経済産業局は、関西のみならず日本経済、ひいては世界全体の持続的な発展に繋げていくために取り組んでいきます。

結びに、経済産業行政への御理解と御協力をお願いするとともに、皆様の御多幸と御健勝を祈念いたしまして、新年の御挨拶といたします。

# 新年ご挨拶

一般財団法人ベンチャーエンタープライズセンター  
関西支部長 山脇 雅則

あけましておめでとうございます。

昨年からの変化は、世界的に目を見張るものばかりです。日本の中においても業種別に企業が減少していることは多くあり、他方においては合併、M&Aが盛んに行われています。日本は中堅、中小企業が伸びてゆかないと発展しません。ベンチャービジネスが盛んに誕生しないことには日本の先行きが危うくなります。その付加価値に相当するものが、利益を生み出すことにより発展させます。新陳代謝を繰り返しながら発展するダーウインの法則につながるのです。

今年も話題を提供しながら、勉強を深めこれから皆様の発展に報いるよう努力していきたくと考えております。

恐れながら、本誌は初版より20年を迎えました。これもひとえに皆さまのお陰様でございます。改めて、感謝を申し上げますとともに、末永くVECを宜しくお願い申し上げます。

(デザインを刷新してみました。)

